
世界再生再配置 Re : ▼Life

パイロガスト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界再生再配置 Re：▼Life

【Nコード】

N7956U

【作者名】

パイロガスト

【あらすじ】

始まりは只一つのピース。

壊れてしまった世界で彼らは何を見て、何を成し、どう生きるのか？

ピースマスター・メルトダウン・ナイトメアリーとは？

新しい歴史はここから始まる！

この小説は息抜きの行き当たりばったりです。更新は不定期の予定です。

壊れていく世界

規則正しく朝起きて仕事に行きクタクタになって家に帰る。

別段、そんな生き方も嫌いじゃない。

欲しい物は尽きないし、仕事には情熱が無い代わりに不満も無い。

いや、年代物になりつつある浮遊輪車の調子が悪いのが、最近の悩みと言えば悩みかもしれない。

きょうび、空を飛べる魔体持ちなんて掃いて捨てる程居るのに、未だに燃料で駆動する飛行デバイスに頼っている。

今まで体力に明かせて力仕事ばかり選んだ俺も悪いのかもしれないけど、乗り遅れ感拭い様が無い。

まだ専用の『レストガン』だって持って居ない所為で給料の高い企業も遠い。

ちなみに最近読みふけている魔道雑誌や研究雑誌によると、レストガンは俺達の猛々しい魔力を扱える程度に抑え方向を決めてやる事で発現を助けるそうだ。

銃の形状をしているけれど医療用具に分類され、頭に向け引き金を引けば波動が飛んで魔法が発動する。

抑制された魔力は俺達の体にも影響し抑制の効いている間は異形の存在<魔体>に変異、相性の良い系統の魔法を使えるそうだ。異形への変異は、本来無い器官・翼や浮遊現象・生体強化機能など不思議な恩恵を与えてくれる。

リスクも凄いと上司に脅されたけど単純に良いなーと思ってしまふ。

「ぼつとしてんじゃねーよー兄ちゃん！ 予定通りに帰りたいんだろっ?」

マッチョな体に牛の頭部を持つ怪人、魔獣系の魔体召喚士のおっさんだ。

同じ様な時期に雇われたのもう解体チームに編成されている。

先輩召喚士達に混ざり破壊鎚で廃壁をゴリゴリと粉碎。

それを防護グローブを着けた俺達、常人組が素早く回収して所定の位置に撤去していく。

それを朝から晩まで繰り返すのだ。

安くて辛い、少しくらいの現実逃避は許して欲しい。

そんな俺、「月島 日高」23才の一日はこうして過ぎて行く。

この日迄は……。

結局、眼を付けられてしまった俺は時間一杯こき使われてしまい
体中が悲鳴を上げている。

「明日、体が動くだろうか？」

不安になりながら、何とか今まで稼いで来た小さい我が家に辿り
着き、狭い階段を亀の様に昇る。

「ぐぎい……。クソ！足が重くてスゲーだる痛い」思わず愚痴が
漏れる。

ドアにすがる様に室内に転がり込み、余り綺麗に出来て居ない廊
下に転がってしまう。

多少ジャリジャリするけど、ひんやりしたタイルの感触が気持ち
良い。

数分後……このままではいけないと、理性と根性を総動員して立
ち上がりベッドに向かうべく歩き出そうとして風に揺れるカーテン
に違和感を覚える。

はたして出る前に窓は閉めた筈？ まさか泥棒！？

いや、こんな家に入る泥棒なんぞ居ないと思う。

自問自答の末、警戒しながら奥へと向かう。

窓際に設置してあるベッドに着く前に「ゴツ」と何かにぶつかってしまい足の小指にクリーンヒット！ 悶絶して転がってしまったが拙いと思って視線を巡らせる。

さっきのは銃の様で物騒だけど今は頼りに出来るかな？

けど、犯人はなんで武器なんて置いて行っただろう？

気になって拾うと見た目のゴツさに比べて軽い印象を持った。

それもその筈で、正体はレストガンだった。

人の気配もいい加減しないし、気を抜いて歩こうと一歩足を進めたら床がスパンと抜けた。

床の消滅を切っ掛けにして近くの物から順々に闇へ落下していく。

中には空中で呑み込まれ消滅してしまう木材・壁・瓦に電化製品、魔化製品も沢山あった。

何とか空中を泳ぎ、えっちらおっちら落ちていく。

限界まで腕を伸ばしレストガンを回収出来たけど、俺自身の落下も停まらない。

「やべ、腕つりそう！」腕をほぐしながらキョロキョロしても周りの空間は真っ暗で何も見えない、下だって同じだ。

結構な距離を落下したけどまだ底が見えない……。

もしかして底なしなんじゃないのか、と思い始めた頃に停止した様な気分に包まれる。

どうやら底まで落ちた様だ。

思っていた様な痛い衝撃は無かったけど、何故かここでは意識を保つのが困難でクラクラする。

何か不快なものがガサガサと移動する気配もする。

俺は終わりそうな意識に渴を入れ最後の抵抗とレストガンをこめかみに押し付け引き金を引いた。

「ガアオオ……ン」

轟音と共に俺の中から大切なものが抜ける感覚がする。

目を開けていられない膨大な光量が放たれ不愉快なガサガサの気

配も薄れていく、俺は全部見届ける事が出来ず床に倒れ伏した。

どれほど時が過ぎたんだろう？　ここは何処？　私は確か、森の
広場でいつもの様に歌ってた筈なのに誰も居ない。

「いやあ……。」

怖くて寂しくて涙が溢れる。

暗すぎて何処を見ても何も見えないし、森の奥だつてこんなに暗
くないわ！　形見のマイクを胸に抱きしめて暫く泣き続けた。

散々泣いて少し落ち着いてきた私のお腹がキュルキュルとなる、
こんな事ならすっかり朝食を摂っておくんだったかも。

「へたり込んでても何も始まらないじゃない！」無理矢理に気分を
鼓舞して当ても無く歩き出す。

地面が無駄に柔らかくて凄く歩きづらい、ムチムチした地面を転
ばない様に歩いて居たら薄く光っている場所を見つけた。

駆け寄って見ると、そこには埋まる様にして丸い柄が刺さってい
た。

「これ見たこと有るかも？」恐る恐る引き抜いてみると光がスウー

つと消えてしまった。

「やっぱり見たこと有る……多分、アンプかも？」手持ちのマイクの柄尻に被せるように装着して押し込み、右に回すとカチツと填まる音がした。

「行ける」魔力を流すと淡くラインが光る。

試しに少し歌ってみると予想より大きな音が出てビビる、そこかしこがザワザワする感触に怖くなってまた泣きそうになり、必死に走り回った。

急に全力疾走したせいで疲れてこけてしまい、地面に転がり感触も気持ち悪い。

涙も止まらないし、わき腹も痛い。

「私、起きてから泣き過ぎかも」悔しだけで立ち上がってまた前に向かって歩き出す。

もう時間の感覚も無いしどっちに向かっているのかも分からない。

座り込んでしまいそんな気持ちだったけど、かなり遠くに光の塊が見える気がした。

気の所為でも良い！ もう気力が持つ気もしないので……最後の全力疾走と決め込み。

今度はこけても涙を押し込んで齒を食いしばって走った。

けど、駄目なの。

近くまで来たのに……何か有りそうなのに！ 気力も尽きてしまった。

倒れた拍子にマイクがすっぱ抜け、放物線を描いて地面を滑る。

マイクは同じく、倒れ伏す日高のレストガンにぶつかり、「キーン」と甲高いノイズを響かせた。

二人の魔力が混ざり合い、ピースとなって大地を成す二人を中心にフィールドが湧き出し遠くへと流れていく。

存在が危うい程に流れていた、二人の魔力の流出もある程度納まりステージが動き出した。

異種族交流？

どれ位、気を失っていたのかハッキリとしないけど、それなりに空腹なんで数時間は経ったのかもしれない。

身を守る為だけど、咄嗟に自分に合わせて調整されていないレストガンでの召喚をした所為か、魔力がスツカラカンで気持ちが悪い。

また使うには魔体調整士を見つけ出して調整して貰わないと厳しいかもしれない。

けど、今こうして生きてるって事は召喚自体は成功したんだよね？

先刻はじっくり確認出来なかったレストガンは、無骨な作りの単発銃タイプで銃身は黒、赤い装飾ラインがアクセントになっている、渋いと言つか古臭いデザインで何となく骨董品の様な雰囲気を出しているモデルだ。

痛む頭で状況を確認しようと見回してみると、目の前に見た事も無い少女が倒れているのが眼に入った。

上手く動かない体で少女を揺すってしまってから、頭とか打つてたら拙いのか？ とハツとする。

しかし、取り越し苦労だった様で呻きながらも少女は起き上がり俺と目が合う。

目を見開き、叫ぶかなっ？ と思う寸前で「くぎゅうう」と彼女の腹が盛大に鳴いたので思わず爆笑してしまった。

散々つばらポカポカされたけど、少女の非力さで殴られても痛みなんてたいした事も無い。

落ち着いたのを見計らって「俺は月島 日高と言う、君の名前は？」と聞くと、状況に気付いた様で「私は森人のエマイト・ラビナスと言います。あのー、月島さんは土人の種族なんですか？ それに、ここって何処だか分かりますか？」と尤もな疑問を投げかける。

気を失う前までは真っ暗な空間に居たと思うんだけど、今は快晴の青空に広い草原。久しく感じた事の無い気持ち良い風が吹き抜けていく。

本当にここ何処だろうね？ 聞くとエマイトも俺に近い経験をしたみたいで風に吹かれながら首を傾げている。

「と言うか、森人って何だい？」好奇心に負けて問うと、訝しげな顔で「種族の総称ですよ？ 森人と土人どちらかの生まれであるのが普通でしょう？」何の疑いも無く自然にしている。

「俺は人間なんだけど、これ以外の種は聞いた事無いんだけど？」お互い、何とも噛み合わない感じがしてむず痒い。

「むー、私も人間さん？ と言う種族に聞き覚えが無いんですよー、どんな種族なんですか？」

知らないらしい彼女に「豊富な魔力と科学を持つ種族で、名誉職に魔体召喚士があがる長寿種族って言って解るかな？」

俺の説明ではチンプンカンプンらしく難しい顔。

逆に彼女の説明「森人は歌に優れ魔歌を継ぐ種で成長が遅く成人しても土人からは子供に見える。土人は陽気で成長が早く魔歌の素質は無いが楽器に優れ肉体的にも強靱に育つ種族、いずれかの強い収集癖がある人が多い」なんて、お互い初めて聞いた事に戸惑い、説明が進む程に違う疑問が沸く。

エマイトは「魔体召喚士」と「科学」が俺は「魔歌」が解らなかった。

「魔体召喚士は俺達の持つてる過剰な魔力を調整して抑えると自然と現れる魔体を従え、身に纏う技術職で系統により沢山の事が出来る、中毒にかかる人もあるが有益な力である。」

科学は魔体を生み出せない人々が知恵を絞り生み出した成果で、物質の構成を読み解き新しい物質に組み替えたり、法則に従った変化を促し違う現象や物体に変える技術なんだ」と説明する。

お返しにエマイトが「魔歌について、歌詞に想いを声に魔力を乗せて世界に歌う事で攻撃・支援・防御・回復の効果を引き出す事が出来る技術で歌手にしか出来ない事なんですよ？」と、念を押された。

どうやらプライドが有るらしい。

これです、と落としてしまっていたらしいマイクを拾い上げ、おもむろに歌い出す。

『私は可愛い兎ちゃん　ねえ、この真つ白い毛皮をみて？』

『私は可愛い兎ちゃん　ねえ、この小さな尻尾も丸くて可愛いでしょう？』

『だから見て　熱く見つめて？』

『これから狩られる　哀れで可愛い　狼さん？』

歌詞に使われている言語は解らないけど、どうしても注目しなくてはいけない強制力がある気がする！

暫くのほほんと聞いていたけど、実はまずい状況じゃないかな？

「ねえ、エマイト。なんか周辺に気配が増えた様に感じるけど、大丈夫！？」

気持ち良く歌っていたエマイトがハツとして歌を中断……辺りを警戒して猛獣の類は呼び寄せられて居ない様なので安心する。

ばつの悪そうな顔しながら早足でその場を離れながら、「今のが魔歌『注目の強制』フォーカス・インターセプトです。」

狩りの最中などに余所見をさせられるので重宝されます」

「今はちよつと調子に乘りました……すみません」しゅんとして謝罪されたし、危険も無かったから良しとするかな。

そんなこんなで二人で話し合い、まずは水と食料の確保となつたけど、いかんせん都市部生まれ都市部育ちの俺にはこんな草原で糧を得る方法なんて知らない。

……けども、それはどうだろう？

エマイトがいそいそと大人の拳骨に近い物体を集めている。

それは何かと聞くと「陸海老ですよ、知りませんか？ぷりぷりしていて美味しいですよ？沢付近に沢山居るので水場も近いかもです」嬉しそうに言う、その陸海老はどう見てもずんぐりした団子虫にしか見えなくて俺はちよつと気持ち悪い。

暫く陸海老のを捕獲して歩いて沢を発見。

二人とも疲労が溜まっているので早く寝る事に決めて、薪の替わりの小枝を集めて戻る。

「ちよつとくらい先に食べちゃっても良いよね？」楽しそうに陸海老を剥くエマイト。

背中に割れ目があつてそこが脆く、卵を割る様に押し広げるとコキヤつと音がして外殻が足ごと割れる。

背中まで頭の殻が伸びているのでそこを掴み腹側に押すと頭が外れる。

更に回転させて抜くと腸も一緒に抜けて身だけ残る。

確かに食い易そうだけど……なんかグロイな。

木陰から覗いて見たけど少し怖かった……そして悔しいけど、美味かった。

ある魔人の場合い

ここは何処だろう？起きているのか寝ているのかも区別が付かない。

なんだか固めのゼリーの中を泳ぐ様な感覚がして酷く気持ちが悪い。

逃げたいのに自分の意思に関係無く圧倒的に何処かに流されている。けれど不思議と恐怖は無い……不自然な程に。

けれど、唐突……まるで生まれ落ちるかの様に僕は意識を吹き返した！正気に返った僕はまず身の回りの異変を探した、服装・装備は意識混濁になる前と一緒だったけど嫌な汗で下着まで全身ぐっしよりだ、早く流して着替えるか脱いでしまいたい。

更に詳しく辺りを見回して気付くが見た事も無い景色だった。

気温は高めで湿気が多くて息がし辛く、遠くには豊かそうな森が見える……食い物が見つかるかもしれない雰囲気がある。

意外と空腹だったみたいで腹がなるが、まずはこの酷い格好からだろう。

替えの服など無いので仕方無く左腕のレンズホストから水のレンズを取り出す。

普段なら指定したレンズが呼び出されるんだけど見た事も無いレンズが出てきた。なんだか得体がしれないので見なかった事にしてホストに戻し最下層に入れ直す。

なんかさっきの光景が幻じゃないなんて思いたくない。（矛盾は気にしない方向で！）

気を取り直して再度、水のレンズを取りだし額の一際大きな魔眼に読み取らせる。

成人してから知ったけど、大きい魔眼はそれなりに希少で、魔術補正も高いらしい。ピタツと眼前に浮かぶレンズから刻印が瞳に吸い込まれ用無しになったレンズは砕けて大気に溶けて消える。

後はイメージして『流水』と呟くと想像通りに頭上に清水が沸き起こり汚れた体に降りかかる。

豪快に服ごと体を清め、やっと一息つけた。

次に木陰に移動して誰も居ないのを確認、恥ずかしいので手早く濡れた衣服を枝に干して同じ様に『脱水』と呟くと衣服から大量の水が絞られほぼ乾燥間近の状態になる。

すぐにも乾きそうだから放置して飲み水を出し喉を潤す断然、生き返った気分になった。

説明すると、僕が使ったのは瞳術と言って魔導書原典をレンズに

封じ込め、魔眼に取り込んで使う瞳書記の技で魔法に近い事が出来る、その技術で身の回りの不満を解消した、僕は職業・生活術師なのでお手の物ってやつなのだ。

純粋な本来の意味での魔術は失われて久しいと学校では教わったけど十分では無かるうか？

何時からか僕達には複数の魔眼と言う視覚以外の感覚器が有ってこれで刻印を読み術を使う様になったのは何時からか判然としないらしい。

魔眼は文字通り魔力を見る目だ。

ちなみに魔導書の再封印や付け替えも自由に出来る。これが出来ずに魔導書を少ししか読めない人は単純に魔眼師と呼ばれ、術師とは認められないようだ。そう言う僕は前者の瞳書記と言うやつで意外とエリートだったりする。

まだ痺れている頭を覚ます意味で、瞳術の基礎や歴史をふり返って見たけどあまり効果が無かったみたい。

頭をフリフリ乾いた衣服を着用して読み込んだある刻印を確認。

まずは火の刻印、次に水の刻印、転移の刻印の3枚。

視力のある両眼には今は入れていない。

何故か？長く着けていると固着してしまうからだ。

何故か視力のある眼に装着し続けると固着するかは謎とされている……反面、固着すると威力や使い勝手が良くなる一生の付き合いになるけどね。

昔はくり貫いて魔導石として売るなんて非道な事もされていた様で恐ろしいけど、一番は着けたまま顔を強打されると効果が暴発するのが恐ろしい。

3枚目は転移の刻印……予め出向いてマーキングした場所に瞬間移動する技なんだけど、防犯上、町の中心には転移返し of 刻印があるので手前までしか行けない様になっている。

俺の暮らしてる町のランドマークの情景を想像して転移を試してみただけで作動しなかった。

目の前をマーキングした場所には転移出来たので不具合では無い様だ。

町のランドマークが破壊されたんだろうか？何か変な事に巻き込まれたのは確定かも。

うんざりするけども気持ちを切り替えて森に向かう事にする、空腹が耐え難くなってきたので果物でも有れば良いなーなんてヘタレた考えだったり。

だって平和で、戦う事も無い時代、野生動物を捕まえて屠殺とか無理なもの！！

嫌々ながらも森に向かい護身用の武器の代わりになるような物を
探してボールの様な物を拾う。

エクスカリボール来たこれ！……っで、ええ！？なんでボール？

良く良く見回すと、所々に硬い材質の灰色の地面や金属の塊、木
の加工品などが狭くない範囲で見とれた。

悪い冗談かなんかだろうか？

ある魔人の場合（後書き）

少し短いかもしれませんが……。

異邦人と魔人

「カン カン カン カン カン カン」

教会に設置されている大鐘が甲高い音で打ち鳴らされる。

どこか女性の悲鳴の様な忌避感が有るのは多分、意図したものなんでしょう。

何故ならそれは警鐘の合図であるのだから。

最近、頻繁に現れる怪物……悪夢体。

学術的にはナイトメアリーと呼ばれると物知りのテッドが言っていたのを不意に思い出す。

今、目の前に居るこの怪物は確かに悪夢の名を冠するに相応しい容貌をしている。

殊更に美しい顔立ちに悲哀を張り付け、見るに耐えない体色にその姿、そして皆が一樣に女性に見える事。

そう、あれらには女性体しか居ないのだ。

この部分を皮肉ってナイトメアリーと呼ぶのかもしれない。いけない、呆けてる場合じゃないわね。

蠢く触手を小型剣で断ち切りフットワークで翻弄する。

ギルド所属の術師達が各々で得意な術を放ち、肉体自慢達が得物

を叩き付ける。

紡がれる詠唱と破壊音。

普通なら欠片も残らない猛攻に少しも怯むこと無く佇む悪夢体
> ナイトメアリー <。

あれ？

なんかダメージ受けてくない？

嫌な予感がして普段、人前で出すことの無い、幻想人形たるヘビ
イ・エンプレスを咄嗟に前面に喚ぶ。

泣き叫ぶナイトメアリーが体をたわめて暗い紫色の収縮する球体
を高速で放出。

それに触れた私達は呆気なく意識を手放した。

-
-
-
-

酷い頭痛と共に目を醒ました私が初めて見たものは鬱蒼と繁る木
々だった。

私達エルフには見慣れた光景。

けれど、地面は斑に固く灰色の石の様な物が混じり木の洞や木肌
から直接、石の棒が飛び出したり。

いやに固い紐の束が絡まっていたり、極めつけは民家の残骸と融
合してしまったりしている。

「何よこれ……酷い有り様」

森を故郷に持つエルフたる私には不快すぎる。

「ここ、何処かしら？」

ポツンと本音が零れ不安が募る。

何処を見回しても人の気配が全くしない。

こんな所で座っていても何にもならないと勢いをつけ立ち上がると、人里でもないかと探索する事にする。

幸い何処もおかしな所も無いし、痛みも変な動きをする箇所も無い。

森の奥と思われる場所は避け外側に向かって歩く、随分広い森林の様で中々抜け出す目星がつかない。

見た事の無い植物が多く、生き物の気配も薄い。

違和感はあるけど詮無い事。

後で調べる事にしてかなり高い木にスルスルとよじ登る。

ほぼ天辺まで登り辺りを見回してみると、成る程果てが見えないほどの大森林な訳だ。

腰のポーチから方位計を取り出し左端に見える河の方角を調べる。針が指したのは西……当面はそちらを目指そうかと考えてるうちに北の方で土煙と微かな声が聞こえる。

人が居るかもしれない！

「でも、何かに襲われてる？」

不安だけど 知り合いだったら寝覚めが悪すぎる。
さっさか降りると心を決め、北へと走り出した。

何だけど、結論から言うと縁も所縁も無い人みたい。

しかも最悪な事に敵はナイトメアリーかもしれないし！！

見た目、股ぐらに老人男性の頭が逆さまに生え腕は四本、本来の頭がある場所には醜悪な小鬼の様な顔が載っている。

死相が濃くマトモじゃないのは間違いない。

「君、早く逃げて！多分、敵わないから！」

後ろから見る彼は普通の人間男性に見える、普通の人っぽい。

何処で拾ったのか、ボールの様な物で殴りかかっているけど明らかに素人丸出しで当ててる意味すらない感じ。

「下がって！」

再度の警告。

私に気付き、振り向いた彼には瞳が五個あった。

一瞬、怯んでしまったけど無防備に振り向いちゃってる彼が悪人には見えなかったから、今は捨て置く事に決め愛用の小型剣を抜き
ヘビィ・エンプレスも喚んでおく。

「こんなにヘビちゃんを喚ぶのなんて久しぶりね！」

軽口から一転して気合一閃！上半身のひねりを効かせたフック気味の斬撃を胴体に食らわせ、戻す左の回転の斬撃が更に×の字の傷を作る。

背中から私の体を突き抜けて伸び上がったエンプレスが頭部を挟む重い拳撃を叩き込む。

「オカマ嘗めんじやないわよ、ウラァ！」

つつい気合いの声を出し。ヘビィ・エンプレスの特殊能力【重力撃】を組んだ拳に宿し、上から降り下ろす。

押しつぶす異音と共に地面が足首程まで陥没。

ひしゃげた怪物はビクビクと痙攣しているが動けるようには見えなかった。

もうこんなのは慣れた筈なのに何故か今日は動悸が収まりにくい。

怯える心を隠して、後ろの彼の様子を見るために振り返った。

「大丈夫……「危ない!!」……夫？」

間髪入れず炎の花がすぐ横で弾け、酷く驚いたせいで身が竦んでしまう。

「何々なに何、なんなのよ!？」

軽くパニックを起こして元凶を見ると怪物の腕が吹き飛んで燃え盛っていた。

「ちよ、森の中でなにやってんのよ、あんた!？」

急いで水筒の中身をぶちまける事で事なきを得たがなんて事すんのよ、この子。

「助けてくれたのはありがとう」

「けど、燃え易い場所で火の術はやめて!火事になったらどうするの!？」

「はい、あの……すみませんでした!」

ガバツと頭を下げられて面食らったけど、強がって「わ……わかれば良いのよ」なんて言っちゃた。

悪かったかな？

気まずい雰囲気になっちゃったけど、気分を入れ替えて怪物を観察すると死体の傍らに光る玉が転がっているのが目に入った。

「なんだろう、これ？」

迂闊に触ったら体に吸い込まれてしまって焦ったけどなんの変化もないみたい、なんだったんだろ？

「どうしました？」

何でもないわ、とうそぶき「こんな所で知り合ったのも何かの縁だと思うの、私はエルフのアマンディオ・イクシリア・ガロ・ベテイよ、よろしくね？」と言うと

「あ、僕は魔族のアルゲイズ・モリサキと言います。こちらこそよろしく願います」と返してくれた。

「はい、よろしくー。と言うか私、魔族の人って初めて見たんだけど皆、モリサキさんみたいに目がいっぱいあるのかしら？」

私の質問にハツとした様でにこやかに笑う。

「はい、皆そうですね。僕もエルフの方に会うのは初めてなんで失礼じゃなければ、貴方の長く尖った耳と一緒にですよ？」と言う。

なら種族的特徴で、尚且つ優劣や美醜の基準なのね。

「ちなみに、この辺の地理には詳しいかしら？気が付いたら見知らぬ場所で困っていたの」

「残念、僕も同じ状況なんです」

「あらそう？ならここから西に行くと河が有るみたいなの、協力して人里を探さない？」と言う私の勧誘にすぐさまのって来てくれたアルゲイズ。

なんでも、野外活動の経験が無いんだって、今までかなり裕福だったのかしら？とにかく先ずは里か、出来れば文明のある場所に行きたいわね。

知らない植物達を見て改めて強くそう思った私達だった。

口は災いの素

私達は警戒しながらも特に危険も無く西の河を下流へと向かい歩き、時刻は早くも夕方になろうとしている。

アルゲイズの住んでいた地域では時刻が正確にわかるみたいで、P17刻と言うらしい。

人間歩けば疲労が溜まる、今みたいに先の見えない旅なら事更だと思う、戦闘もあつたしね。

ましてや彼は暗闇に強く無いそうだ。（エルフは夜でも結構見える）

今日は早いけど切り上げて寝床と食事の確保を提案したの。

「アマ……とつ、ベティさん、穴の深さと葉の入れ具合はこれくらいで良いですか？」

「そうね、これで大丈夫よ」

彼には早々に名前の方で呼んで貰う事にしたので、今日からベティって呼んでね？

ちなみにお互いに旅装でないので毛布等の必需品が無く衣服も薄手、快適に寝る為にエルフ流の野営術を伝授した所なの。

手順は簡単、地質は問題無かったから小石や異物を丁寧に避けて、木の側に浅く広い穴を掘って落ち葉を敷くだけ。

こんな事だけで大分寝やすくなるのだ。

後は大きめの葉でも良いし、多めに葉を盛って潜り込んでも良い。私は残念だけど警戒の為に木の上で寝る予定だ。

「次は焚き火ね。料理にも使うから、なるべくガタガタしてない大きめの石を集めて積んでくれるかしら？」

「私は薪を拾ってくるわ」と、お願いして歩き出す。

この辺は暑さも酷く無くカラッとしていて過ごしやすそうだ。森に戻れば薪に使える木切れやら良い臭いのする果実、食べれそうな野草もあり食材も豊富、丈夫な大きな葉で作った簡易袋に包んで戻る。

なんか奥さん気分♪

んん？

何よ、夢ぐらい見ても良いでしょ？

まあ、あまり欲張っても嵩張るし傷むかもしれないから程々にして帰る事にしますか。

野営地に戻るとまだ河原に彼が居るのでどうしたのか？と窺うと彼が手をかざしている水面が薄く光っている、形は円の様だけなんだろう？

彼が呟くと水が派手に弾け、手元には数匹の川魚の塊が現れた。

「びつくりした、それも魔術なの？」

「はい、正確には術でも無いですけど便利なんですよ。魔力コーティング」

じっくり、しっかり見ても私には魚が纏まって浮いてる様にしか見えない不思議。

「私には何も見えないわよ？」と言うと「あれ？ ベティさん魔力無いんですか？ 戦闘中に魔術らしき事してませんでしたっけ？」

「あー、あれはまた別のモノなのよ、後で説明するわね。とりあえず上がって、料理しちゃいましょう？」私の提案に彼は「捕ったは良いんですけど、料理も出来ないんです。僕」と来た。

これは、暫く料理当番決定ね……私。

辺りも暗くなって来たので、薪を適当に配置して彼に火を付けて貰い、細いのを選んで皮削り、内臓の処理を済ませた魚を刺して焼く。

味付けは秘蔵の岩塩のみだけど、新鮮で美味しい。

後は野草の果実ソースに隠し味程度の岩塩、最後に皮むきフルーツ。

所謂、エルフ料理ってやつになるのかな？ 遠い記憶を掘り起こして思い出す。

誰かと野山で食事だなんて懐かしい、まるで子供時代に還った様な錯覚をおぼえた。

よっぽど腹が空いていたのか、彼は凄い勢い料理をガツガツ消費していく。

「そんなに焦らなくても逃げないわよ」

笑いながら水入り葉のコップを置いてやる。

落ちついたのを見計らって、彼に戦闘中に火術を使ってたけど攻勢術師なの？ と聞くと。

「あれは咄嗟なんです、あんな風に魔術を使ったのは初めてですし、僕の国では違法行為です」

だって…… だから、あんなに雑だったのね。

「僕は故郷では生活術師をやってました。ベティさんはどんなお仕事をしてたんですか？」と言う質問に。

「私はしがない便利屋よー」と答えながら、生活術師ってどんな仕事か聞いてみる。

何でも会社に所属して求めに応じて術を使ったり、魔術コーティングで供給ルートを作ったり、上位になると魔術装置の全体運用や制作をするんだそうだ。

彼はまだ使われる側なんですけどねって言ってた。

所々理解出来ない言葉もあったけど、今は良いや。

瞳書記についても説明して貰ったので、彼の応用力の高い魔術の使い方も理解出来たしさ。

私の居た所の術なんて、長い詠唱と魔術補助で決められた効果しか出ない術が主流だったから不思議だったのよね。

お返しに私の能力の説明の為に幻想人形ヘビィ・エンプレスを喚ぶ。

喚ぶと言つても私の頭の中からなんだけどね。

彼女は私の分身とも言える強い妄想なの。

今はお互い別のもものだけれど、妄想が深化すると融合して怪物になるもの……ある意味で病なの。

小さな王冠を被り、その下に道化の帽子を被る顔の無い女王。

体にピッタリとフィットした煌びやかなドレスを纏っているが筋肉の付き方は大柄な男性のそれ。

異常に力が強く武器を壊してしまうので肉弾戦が得意、重力を操る能力がある。

私達みたいのを幻想士と言うそうよ？

私が説明を終えると、何だか彼がしんみりしてしまっていた。

「あの、だからオカマなんですか？」なんて聞いて来た彼にお仕置きしながらも、なんか慰められた気もした夜だった。

「ア、アアアーーーー！」

彼の悲鳴の響く良い運動ね？

出会い

「昨夜は良く眠れた？」

時折、歩行に邪魔な枝や蔓を切り払いながら聞いてみる。

夜のストレッチのお陰で泥の様に眠れました。
アルゲイズが少し恨めしげにむくれる。

あなた体固いのねー、関節が固いと体に悪いって良く聞くわよ？
って笑って済ませる。

なんなら、もっと激しい運動してあげよっか？　なんて下から覗き込むように屈み、挑発してみたけど。

ヤバい、腰にくるわ。

実はこの体勢きついで直ぐに振り向いて歩き出す。

背後から即答で「結構です！！」ときて苦笑い。

私もストレッチ増やさなきゃ駄目かしら。

こんな感じで間に休憩を挟みながら、着々と川沿いを下る。

隣の河川は相変わらず川幅が広く歩いて渡るのは困難そうだ。

時折、森の中に埋まってしまってる廃墟を家捜しして使えそうでかつ、嵩張らない物や高価そうな物を中心に頂いていく。

もし、私の嫌な予感が的中していたら必要になるだろうから重いのは我慢。

無理になつたら彼に頼もう。

そんな事を考えてる片隅にも常に、便利屋の皆、無事だと良いななんて気持ちがある。

ナイトメアリーとの戦闘中に飛ばされたので、あまり馴染めてなかったけど心配だった。

――日高サイド――

拙いな、空腹で目が回りそうだ。

幸い、水だけは豊富にあるから死にはしないけど、たんぱく質が足りない過ぎる。

それと言うのも野生の動物に襲われる度に【魔体】に変身しているせいだ、調整されている銃じゃない上に変化に慣れてない俺は全く制御が効かなくて対象を灰にしてしまうまで停まらない。

燃費も非常に悪く、緊張が解けると気絶を繰り返しているから道中、たいして進めていないのも痛い。

連れのエマイトは戦ったりとか論外だしじり貧過ぎる。

倒れてる間に果物や陸海老を用意してくれるから助かってるが、このままだとどうにもなら無くなるのも時間の問題だろう。一人で先に行かせるしか無いかと思い詰めていた時、エマイトが敏感に人の声がするって周囲を警戒しだした。

戦闘は未経験だけど感覚や気配に鋭いらしい。

軽い身のこなしで曲がり道を窺うと遠くに男性の二人組が見つかったそうだ。

「鎧着てる人と日高みたいな服装で、特に忍んでる様子はないよ」と言う。

なら、頼ってみるのも良いかもしれない。

保護してもらってくれ、俺はそろそろ限界かもしれない。

そう提案すると案の定、却下された。

「駄目だよそんなの！ 日高がそんなになつたのは私のせいだもん！！」

思いの外、慕ってくれてたんだなとジンワリするけど、もう駄目だ……本当に意識、保て……な。

「日高！大丈夫！？」

彼女の悲鳴に上手く頷けたかはわからなかった。

――ベテイスайд――

「そこの人達すみません！ 急病人が居るんです、助けて下さい！」
血相を変えて駆けてくる少女に、

「私はアマンディオ、連れはアルゲイズよ、貴女お名前は？」

「それに相手の方はどんな状態なの？」

多分、一番年長であろう自分から話を振ると、目を見開き失礼に気付いた様で言い直す。

「すみません、私はエマイトと言います。」

「連れの日高が能力の使い過ぎで意識を失ってしまったんです、外傷はありません。」

「どうか！」

切羽詰まっているのだろう、彼女の顔色も悪い。

「わかったわ、連れていって」

嘘は吐いてないと感じたので、アルゲイズに視線を投げてから駆け足で向かう。

少し進んだ木陰の横になっている男性が1人、素人目にも呼吸が荒くひどく汗をかいているのが見てとれた。

服装はアルゲイズの様に普段着に近い。

上等な生地で丈夫そうなズボンとシャツ、手に無骨な鉄の塊を持っている。

症状を見て心当たりがあるのかアルゲイズが推定、日高さんの額に手を置き、魔力を流し込んでいく。

「深刻な魔力枯渇を起こしている様ですね、これ以上に酷使すると死んでしまっていたかもしれません。」

見た目より危ない状態だったと知ってエマイトちゃんが泣きそうな顔になる。

「少し魔力を分けたので、安静にしていればじきに動ける様になると思います……が、暫く魔力を使うのは禁止ですね」

「もしかしたら魔力酔いにもなってしまったのかもしれませんが。これは習い始めの人に良く出る症状ですが。んん、減り幅が大き過ぎますね。それにしても凄い魔力量してますね、彼」

「なんだかブツブツ言ってるけど声が小さくて良く聞こえない、とりあえず無視してエマイトちゃんを労わりつつ今日はもう動けそうに無いので野営と食料の準備。」

治療で動けないアルゲイズは残してエマイトちゃんと手分けして設営したのだけど、彼女も駄目ね。

陸海老ってやつだけしか用意出来なかったみたい、数も少なかった。

仕方無しに狩りに出る事を告げ、皆から離れて森へ。

兎の様な動物を捕獲して血抜きし解体して戻る。

その頃には準備が出来ていたので、手早く蒸し焼きにして、ついでに陸海老の足も取り除き、教わりながら頭を除去。一緒に蒸してみた。

味付けはいつもの塩だけ……ううん、味気無い。

夕食の頃には日高も目を覚ましたのでご飯にしたらんだけど、二人ともむせび泣いちゃってどうしたの!?

聞くに、何でもここ二・三日食生活が悪くて栄養が足りてなかったみたいなのね。

生の陸海老を齧ったり、渋い果物で辛うじて空腹を誤魔化したりとか、水のがぶ飲みとか、姉さんもらい泣きしそうだったわ。

そんなこんなで自己紹介も済ませ、夕食は続く。
それで、やっぱりお互いの種族で揉めたわね。

私がエルフでエマイトちゃんが森人（エルフとは言わないそうね）アルゲイズが魔人、日高は人間。
見事にバラバラでかつ自分の国には自分達の種しか居なかったし、怪物も初めて見たらしい。

日高とアルゲイズにいたっては、野生動物を見たのも襲われたのも初めてだとか。

どんだけ平和なのよ、一体。

極めつけは武装した事が無い三人と皆の能力が違い過ぎる事、お互いの道具が誰にも使えない事。

「ねえ、仮定の話なんだけど。私達、違う世界に居るのかもしれないわよ?」

「「まさか!?!」」

流石に否定的意見しか出ないか。

「結論を出すのは早いと思うの……。」

「皆、生活力皆無だし、人里まで一緒に行って情報収集しましょう？」

この提案には直ぐ様、賛成の意見が上がった。

基本方針は廃虚の探索を交えつつ食料採取。

男手二人は戦闘の仕方と血抜きと解体、出来る様なら料理勉強。

エマイトちゃんは私が食べられると思ってる果物や草の記憶と料理かな。

少し話し込んでしまったけど、病人の日高には寝て貰って片付けを済ませ、初めての交代式の見張りをする事にした。

ちなみにパールは日高に使って貰う事にしたのは言うまでも無い。

落ちる者達の村

一晩ぐっすり食って寝たお陰か、日高はなんとか歩けるまで回復した。

本当はまだ動かさない方が良さしいけど、黙ってても事態が好転するとは限らない。

食事と休憩だけはちゃんと取る様にして更に川沿いを下っていく。

宣言通り、まだ新しい廃墟を調べつつ、襲ってくる野性動物を二人に仕留めさせたり、血抜きを教えたなら残念な位駄目ぼだったり。エマイトちゃんは炭量産機になっちゃうみたいで採取に力入れて貰ったりした。

移動三日目の昼頃、前方に生活の煙らしきものと集落の影が皆の目に映った。

順調とは言え先の見えない旅……、良い加減気持ちが荒んできてたから柄にもなくヘブン状態になっちゃったけど、こんなに嬉しいかつたの私、初めてかも。

なんて、喜び勇んで踏み込んだ村でいきなりの難題。

はい、先生！ 私達、言葉が全く通じません。
完全に予想外だったわけよ。

辛うじて、日高は訛ってるけどなんとか会話が理解出来るらしい。私らはまるでわからないよ。

こんな事態になって初めて、皆の喋る言葉と口の動きに違和感があるのに気付くとかどんだけよ。

久しぶりに自己嫌悪。

仕方無し、情報収集と交渉は日高に任せて脇に控える事にするわけ。

・・・日高サイド・・・

俺しか会話が理解出来無いらしいけど俺も完璧じゃないんだよね、なんか方言？　みたいな感じ。

聞いた事無い言い回しとかあるし。

さつきから話してる目の前のおじさんはメルトダウンナーの出た森を抜けたなんて凄いな。

とか、先にある村の様子とかやたらと聞いてきて口を挟む隙がない。

とりあえず、俺達の来た方向の森にメルトダウンナーとか言う化物が居る事。

森人の村がある事、村内の宿屋の場所、何でも屋の存在について聞く事が出来た。

礼を言って別れた後、皆で相談する事に。

予想通り真っ先に森人の村に向かいたいとエマイトから希望が出る。

同じ種族の村があるなら帰りたいだろう事はわかる。

少し疲れを癒した後、行ってみる事にあっさり決定。

テンパリ過ぎて、貨幣について聞き忘れたからまず何でも屋に行き、その後に宿に向かう方針になった。

歩き出して数分もしないうち、広い土地に随分疎らに民家があるんだな〜と思ったが村人を見て納得する。

会う人の半数は魔体だったからだ、人間型、機械類型、魔物・魔獣型などタイプは様々だ。

さしずめ、ここは魔体召喚士の村になるのかも？ 三人とも驚いてたから普通の事じゃないのな、魔体生活。

けど、魔体生活者が多いと言う事は調整する人も居るって事になる。

この役に立ってないレストガンも調整してもらえるかも？

更に、俺の知らなかった魔体のなんたるかの他に、元・俺の家周辺の事も聞けるかもしれない、エマイトじゃないけど気がはやる。

ベティ達に話してみたら、面白そうだしメインで調べてくれるそうだな。

自分、知らない町（村かな？）を皆でわーわー言いながら巡るな

んで、実は久しぶりかもしれない。

数日前まで生活に押しつぶされ、くそ下らない職場で使い倒されてたなんて信じられないかも。

まあ、死に掛けたけど、俺限定ではこの奇妙な出会いに感謝かな。

「ここかな？」

何でも屋は村の中央広場にあり、廃屋を改装したような外観だった。

「いらつしゃい！」

店内には恰幅の良いゴリラに似た褐色の店主の男が1人。木組みの箱を売り台にして所狭しと品物が並べてある。

大まかに物分けされているけど、統一感が無いので煩雑として見えるのは仕方無いか。

「所持品の買取と旅装の見繕いをお願いしたいんですけど」と言う
と。

「あいよ、兄ちゃん若いのにえらい丁寧に喋るね」と言われた。

後ろに居る人達はとうするとの質問に、彼らは言葉がわからないと説明すると、適当に見てて良いと許可を出してくれた。

随分、フランクな人みたいだな。

促されるまま、カウンターに動物の牙や爪・鱗に始まり廃鉄や破損した機械部品・ボールを置く。

宝石もいくつか有ったけどここでは出さない様にベティに言われていたので、別の袋に入れてある。

「随分沢山見つけて来たんさね、どれ」手にとって眺め叩いたり動かしたりして鑑定する。

「そうさな、生態素材は黄昌一枚。鉄は黄昌二枚。パールは青昌二枚かなー良いかい？」

高いのか安いのかサッパリわからない。

固まっつてるとアルゲイズが、「この硬貨、俺達の使っていたのに似てる」と言うので見せてみる。

どうやら鉱石で無く、魔力で精製されてるものらしい。

核は一緒だけど魔力量で色が変わるのかも？ だって。

しかし、物価がわからない……ここは降参して素直に聞いてしまおう事にする。

「実は俺達、ここに来たばかりでお金の価値基準がわからないので教えてください」とホント素直にお願いする。

するとびっくりした様で

「なんだ、落ちたてなのか君等！じゃ、この緑……」と、タンマ！
！落ちたてって何！？」店主の言葉を遮ってつい、怒鳴ってしまう。
仲間も不審気だが気にしない。

「本当に落ちたばかりなのな、説明してやるから奥に行こう」店主が看板を下げ奥に向かう。

店舗を遮る布の奥は住宅部分になっている様で奥にベッドが一つ、色んな物が雑に散乱している。

「汚くてすまん、自己紹介がまだだったな、俺は元町・小町だよるしく」自分含め片手に5人分の飲み物を持つてくる。

視線に気付き、これでも元居酒屋店員なんでねと笑う。
全員の紹介を終え本題に入ると、

「最初に言つとくと村の人間は皆、気付いたらここに居た連中だ」と言う。

「知り合いと来れた奴は皆無。ここが出来てまだ三年と経って無いので皆必死で生きてる、帰る方法はわからない」

質問は？ と返されて言葉に詰まる。
通訳した仲間も同じ反応だった。

それだけで現状、どうにもならないと知れてしまったしなー。
けど、ベティの前もつての予想に近かったのであまりダメージは無い。

しいて言えば早急に言葉を覚えなきゃいけないと言う事位か。
今度は遮ってしまった硬貨の説明を受ける。

硬貨には緑昌、黄昌、青昌、赤昌があつて出した順に価値が高い
そうだ。

緑昌の10倍が黄昌、その10倍が青昌と10倍ずつ価値が上がる。

半貨は核のみで、かつ破損してない物らしい。
次に店に戻り、持ち込み品を買取してもらう。

「パンパン」

思わず世話になったボールに手を合わせてしまった。

「ありがとう、エクスカリボール……君は重かった」意外と相性が悪く使いこなせなかったんだよな。

受け取った青昌を両替して貰い、黄昌十枚にして四人で三枚ずつ所持。

残りは武器用資金と生活費としてベティに管理して貰う。

俺の武器なんだけど、どうやら魔体の相性によって持っても意味の無い武器があるから調整士に聞いてから来る方が良さそうだ。

敵ついけど良い人だ、元町さん。

「出来れば小町とは呼ばんで」とお願いされるのもやぶさかでは無いよw

今日、最後は宿だな、村唯一の宿泊施設と言う事で場所は直ぐに見つかった。

食堂としての営業が主の様で部屋数は三部屋程、女将さんをお願いして男女二部屋借りる事にしてとりあえず三日程泊まる事になった。

（ベティは女部屋らしい、解せぬ）

宿泊者には朝飯と夕飯がつくみたいで嬉しい事この上ない！早速食べる事に。

少し待ったがお茶とステーキにサラダと定番な感じだったけど、妙に懐かしくて涙が出そうになった……バターのコクが塩・胡椒と混ざり絶妙。

てか、胡椒有るんだな、この地域。

危険な魔体調整？

皆も緊張の連続で思ったより消耗していたらしく、部屋に戻るなり眠気に負けて熟睡。

そして、あっという間の朝日。

やるな、ベッドの魔力！！ 定番である固いベッドで外よりは寝やすいなんてレベルを越えてフカフカだった。

縫製の得意な魔体の品かな？ お陰で久しぶりに体調が良い。

寝坊助アルゲイズを強引に起こして女子部屋をノック。

いつもは誰より先に起きてるベティも今日は寝坊らしい。

あの人もたまには気を抜ければ良いと思ってた俺は少しだけ安心した。

全員でもさもさ、のろのろ移動して遅い朝御飯を囲む頃には目が覚める。

流石に残りは軽食位だけど問題無く美味しかった、美味しい葉正義！

これからの行動を朝食の席で話し合った結果、エマイトとアルゲイズは個人行動。

俺とベティの二人で魔体の調整士の人に会ってくる事になった。ベティが付いてくるのは単なる興味らしい。

確かに、こんなに魔体生活者が多かつたら気になるよな。

宿から中央広場を斜めに突っ切り、暫く歩いた後、個人宅の庭を迂回して外れの方に歩いて行くと『魔体の調整致します。』の大看板がかかっている。

文字の方も崩れてるけど俺の知ってる文字だった。

やたらとデカイ入口から入るとソファーが5本平行に並べてあり、数人の村人が座っていた。

予想外に広い部屋である。

それに皆、魔体は解いてる様だ。

「なんか真っ白くて病院みたいね？」ベティの質問に当然の様に答えた。

「うん？ 言ってなかったっけ、俺達は生まれた時から魔力障害つー病気なんだよ」

その返答に俺はなんとも感じて無いがベティが苦々しい顔をする。

俺達の魔力は大きすぎて絶対に余るんだとさ、悪い事に複数の高レベル相反属性のおまけもつく。

だからレストガンで属性を封じて、魔の安定を得て魔体で過ごす人が多い。

単純に発現する魔体の能力が生身より優れていると言う側面もあるよ。

けど、脳波ってわかるかな？ 頭の海の波みたいのに直接干渉したり、肉体を変形させたりってそれなりに精神を磨耗するから治せる人が必要なんだよね。

それが調整士の人達と言う訳。

魔力中毒にもなるから尚更なんだ。

だからに召喚士や調整士は人間の名誉職でっ事になったらいい。

なんて説明してたら軽く頭を殴られた。

なんかむくれてるしなんだらう？

ベティは懨然としつつも「仕方が無い事なのね？ 良いわ。んで、座ってればいいの？」と俯く。

「俺は受付で話しなきゃいから、ベティは適当に座ってて」と言い置きカウンターに向かう。

対応してくれたのはお姉さん、名札には仲村とある。

「今回はどういったご用件ですか？」

少し高めの落ち着いた声だ、久々に見る年上のお姉さんタイプに動揺。

「あつ、と、レストガンの初期設定と魔体診断を」と何とか伝える。

ちなみに魔体診断とは、魔体の影響での不調を調べる行為で基本的な治療行為になる。

健康診断の魔体版みたいなもんだ。

「では、レストガンにアンケートを添えて提出して下さい」

差し出された用紙に書かれた欄にサラサラと文字を埋めてさっさか渡す。

「では、呼ばれましたら中にどうぞ」

渡された番号札には68番と掘り込まれていた。

結構、待つのかと思ったけど、直ぐに呼ばれたのでベティと連れ立って別室に向かう。

中は意外に思つかもしれないけど、広くガランとしていて殺風景だった。

一つしかない机は大きく、無骨な木の板の合板で用途のわからない機器がごちゃごちゃ置かれ、乱雑な印象を受ける。

「いらっしやい、初めてだね？ さつさと座りな」

銀灰の混じった黒髪をした白衣の小柄な老女が、付き人の子から日高のレストガンを受け取りつつ着席を促す。

椅子に座った俺はレストガンが自分用で無い事。

使うと気絶するまで魔力を爆発させ続けてしまっけど、必要に迫られて数回使用した事。

過去に倒れた事がある事を包み隠さずに伝えた。

銃を弄り回していた老女は不意に手を止め、何かをした様で銃身の側面が外れ、外装がガシヤリと自動で開き、銃身自体も二つに折れる。

「秘匿機構かい」

内蔵されていたのは一枚の厚い板、材質は不明で三個の宝石が埋め込まれている。

外せない仕様らしく板には両面から精巧な溝が彫られている様だ。

「原因はこいつの様だね……、板の魔力回路にあんたの血を垂らしてやれば個人情報登録が出来るみたいだ」

早速、受け取った板の窪みにナイフで傷をつけ、流された血が溝を隙間無く埋める。

僅かな発光の後、血は板に吸い込まれ板自体を赤黒く染め上げる。

溝に流した血液は見当たらない。

老女が受け取った板を戻し銃身を嵌め直すと自然と外装も元に戻る。

「継ぎ目も無いとは驚いた、どうやらここここ、その穴の同時に押し込む事で開閉するようだね」

「定期的に掃除もする様に」

尤もな注意を受けつつ、更に機器で細かな調整を済ませ此方に銃を寄こす。

「これで使っても大丈夫な筈だ、今ここで召喚しておくれ」戸惑う俺。

「こんなところで召喚して平気なんすか!？」驚く俺に

「私だって魔体だよ、安心おし、結界属性位使えるわ。」

その一言で納得した俺は、良く解つてないベティに説明して壁際に避難して貰いレストガンを頭に向ける。

「いきます」

覚悟を決めて引き金を引く。

「ガアウオン……!」

衝撃で頭が横に仰け反る。

銃口付近を基点にして、七色の光の奔流が渦巻き、日高をあっという間に呑み込む。

「まずいね、抑えたのにこれかい！」

老女は悪態を吐きながら、枯れ枝の様な両腕を体の前に突き出すと起動語を一つ呟く。

『拒絶する抱擁と可能性』

途端、両腕が包帯状に解けて日高を取り囲む。

日高を囲んだ腕と光がぶつかり合い、激しい反発の火花を散らす。そのシルエツトは長物を称えた、古い魔術師を連想させるけれど、ねじくれた天を衝く角が想像を裏切る。

「厄介な……魔王系か」

結界内で荒れ狂う炎を封じながらも一つ起動。

『融和する拒絶の枝葉』

取り囲む腕に判読不能の文字が浮かび、手先に向かい軌跡を残す。荒れ狂う炎は抵抗の限りを尽くすけども、老女の腕の文字が進む度に勢いを減じ、制御を受け入れていく。

全てが統制されたのを感じ取って引いた腕の向こうには、日高とは似ても似つかない怜悧な美貌と鍛えられた体躯、両側頭からねじくれた角が天を衝く黒い肌の魔物が跪いていた。

立ち上がった日高の身長は大体180位、体重も100は越えている様に見える。

冷たいアイスブルーの長い髪と瞳には威圧感がある。

「苦労かけた様だな、感謝する」

声だけは同じだけど感情が籠もっていない。

「冷徹王・ゼルオランの魔体だね」

「そいつは剣・槍・盾を扱うのが上手で、得意属性は破壊系統が精神系統だそうだ。」

武装は無いから買いな、弱点は無いけど纏っている間は感情が鈍るから魔体生活する時は気を付けな」

いつの間にか、老女の右目の前には円形の文字がモノクルの様に浮いていた。

分析系の力らしい。

「参考にする」

魔体から光が帯となって千切れ飛ぶと何時もの日高が現れた。

「すみませんが、魔体について詳しい方に話を聞きたいんですが、誰に聞いたら良いか教えてもらえますか？」

厚かましい質問に「私が教えてやりや良いけど後がつかえてるしねー、自治体の人間を訪ねな。」

「後は細かい検査だけしちまうよ」と親切に教えて貰う。

診断が意外と長く、昼遅く迄かったけどこれで足手纏い卒業かな？ 俺？

月島・日高の有意義な一日

一旦、宿に戻り予約していた昼食を二人で平らげた後、ゆっくりと村を歩く。

自治隊舎は村の入り口門の直ぐ隣にあり、広い空き地を有していた。

門番役二人に空き地で訓練に励む人達が数人見える。

「すみませーん、少しお話良いですか？」

現場監督者らしき人に声をかけた。

対応してくれたのは予想と少し違い、訓練の監督をしているらしい青年だった。

全員、あえて魔体を纏わずに訓練をしている様だった。

ここに、魔体に詳しい人が居ると調整士の方に聞いて訪ねました
と言つと、

「それなら俺の事かもな？」と背後から声。

「隊長、お帰りなさい」

目の前の青年が尊敬の眼差しを向ける。

丁度、昼の見回りを終えて戻った所だそうだ。

「俺が隊長のゼグ・ムントだ、よろしく」

笑顔で握手を交わす。

彼は軽鎧のパーツだけを纏った翼ある鷲と言った魔体の使用者らしく、表情が分かりにくいけども歓迎してくれているみたいだ。

「それで、どういった用件だろうか？」

経緯を説明した後、話し出す。

「俺は魔体初心者なんですが、こんな状況なんで魔体の基本を教えて貰えたらと思って伺いました」

ここは素直に出た方が良くと腹を割ってしまう事にした。

案の定、悪くない対応だったらしく、基礎的な事から軽い実践位は教えて貰えるそうだ。

「そうだな、まず魔体には得意、不得意があるのは知っているか？」

これには「はい」と答えた。

「武器の扱いが得意だったり、魔法攻撃が苦手だったりだな、他に料理が苦手だったりや罠に敏感だったり、走るのが苦手だったりもするのだ」これは意外な事だった。

所謂、個性の様なものもあるらしい。

俺からの、「魔体の苦手な事は出来ないんですか？」って言う質問に

「そんな事はないし、構造上に無理が無ければ出来る。けど、やはり得意な者の努力を越えるのは難しいだろう」との事だった。

自分の魔体に合った成長方針の方が、良い結果になるかもな。

「では、次は魔体の魔についてだな。君は魔法を使った事はあるか？」

余りされたくない話題だったけど、避けては通れないな。

素直に肯定する。

けれど、暴走状態でしか使用した事が無いと言うと良い顔はされなかった。

ちゃんと説明したらわかってくれたけど多用しなくて良い様にならないとな、と言われた。

多分、ゼグさんも仕方無く使った事があるんだろう。

気分を入れ換えて、説明の続きに入る。

魔体の魔法には細かい系統が無いが、大まかに破壊属性・精神属性・分析系・技能系・状態変化系の五種類がある。

近接系魔体で2種、頭脳系魔体で3〜4種扱える可能性があるのが普通だ。

【可能性】なのは、初めから全性能を発揮出来たりしないからと言っておく……精進が大事だ。

話が逸れたが、破壊属性と言うのは反属性を組み合わせた発動方法だ。

俺なら風と土で『固い風』とかだな。

精神属性は『念動』や『咆哮』などの精神技、または精神に影響を及ぼす特殊効果。

分析系は相手の状態を見たり、解析や推測の助けになったりだな、結界術もこの分野だ。

技能系は近接の花形、『ボルテックソード』や『ファイアランス』『影十字』特殊な所だと『セブン・センチブ』なんか、武器を使った直接攻撃系の必殺技だな、道具の使用にボーナスのあるスキルも技能系に入る。

状態変化の使い手は少ないと言うか、明かしたからない人が多く、実態は謎だ。

調整士の婆さんの得意な『枯れ枝節』位しか俺は知らない。後は実践あるのみだ。

まだこの村に居るなら後日、相手をしてやろう。

ほら、連れがつまらなそうにしているぞ。

あんまり美人さんを放っておくもんじゃない。

とか何とか……いやいや、あれはオカマですよ、隊長？

ベティが何の事って顔してるが隊長、目線熱過ぎません？

改めて見ると確かに美人だけどさ。

サラサラの緑のストレートに小さい顔、南国の海みたいな瞳。

体も男らしいとは言えないもんな。

教えてあげた方が良くないだろうか？

一通り俺を茶化した隊長は、休憩の為に魔体を解いて隊舎の中に消えていった。

平常時の隊長は、身長がそんなに違わないけど、やっぱり驚に似た風貌だった。

隊長も例に漏れず魔体と肉体の差異は少ない、飛翔する関係で体重はかなり少なそうだけど、俺の場合はまるで別人になってしまうのはなんでだろうか？

まあ、考えても仕方無し次に行こう。

そして、サクサクと何でも屋に到着。

目敏い小町さんが「良く来たな」と男臭くはにかむ。

後ろでキュンキュンしてる腐エルフは放って置いて、昨日の約束通り武器を見せて貰う事に。

小町さんに「魔王系の魔体を発現しました。剣と槍、盾の扱いが得意らしいです」と伝え、些か大げさに驚いてたけど「なら、一通り試すのが正しい」と言われ、まずは素の俺で構えさせられ、魔体でも構えと繰り返し様に指示を受けた。

その度に真剣に検討してくれた。

俺個人として正面切ってぶつかるのは恐いから盾は必須として、武器はどうしよう？

流石、どの組み合わせでも使っただけなら支障は無いしな！。

まだ必殺技も無いから悩む。

うんうん唸ってる俺を見兼ねてか「なら、剣としても槍としても使える十字槍なんかどうだ？」と出してくれた物に釘付けになった。

柄は短く途中から刃に成っていて、頭の方が十字に交差している……石突きは無い。

そんなに魅力も無いと思う。

「これにします！！」

でも、根拠は無いけどこれが欲しいのだ。

「使い手が居なくて埃被ってたから、研ぎ代含めて黄昌二枚で良いや」

何て言うから、気が変わらない内に払ってしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7956u/>

世界再生再配置 Re：▼Life

2011年10月8日00時17分発行